2015年11月発行（年3回　3, 7, 11月発行）通巻115号

子どもたちの明日

Children, Our Future

2015年11月
115号

目次

・全国・海外に広がる布チョッキンの支援　1頁
・「村の幼稚園」卒園児の今　2頁
・トロピエンクラサン織物センターの女性たち　4頁

丸紅米国会社での実施の様子。各自で持ち寄った布を使って、人形の洋服を様々にコーディネートするのも布チョッキンの楽しさのひとつだ。

1 全国・海外に広がる布チョッキンの支援

日本で布を裁断、寄付と一緒にカンボジアに送り遊具を作る、当会のボランティア活動「みんなで布チョッキン」。この度、丸紅株式会社様のご協力で海を渡り、ニューヨークで実施されました。支援の輪は日本全国、そして海外に広がりつつあります。

布チョッキン協力企業の1つ、丸紅株式会社（東京都千代田区）は、昼休みに布チョッキンを実施、昨年度は人形77体、ボール32個分のセットをご寄附いただきました。その際、総務部・担当者の方が「夏休みに、自宅で家族と一緒にできる活動として支店やグループ会社に布チョッキンを紹介したい、海外でもできそう」とお話されたことが今回の取組みの始まりでした。その時には、活動が日本全国だけでなく海外にも広がるとは想像できませんでした。そして今年7月、担当者の方より布チョッキン説明資料を日本語・英語両方で欲しいとご連絡をいただきました。それまで資料は基本的に日本語のみ。社会人・大学生ボランティアと翻訳を行い、大慌てで英語版資料を作成しました。

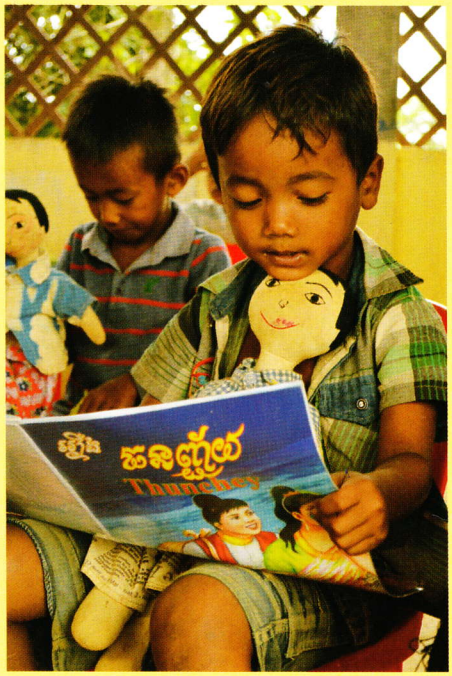
その後、「おうちでボランティア」と名付けられたこの活動は、7月～9月にかけて丸紅株式会社の本社と4つの支社・グループ会社7社、さらにはニューヨーク支店で実施されました。グループ会社では布チョッキン経験者の社員の方が活動について詳細に説明して下さることもあったそうです。多くの方のご協力で人形120体、ボール440個分のセットをいただきました。さらに「ニューヨークで活動実施後、社内報を見たアメリカ国内の支店・グループ会社でも参加希望があり、今後はさらに活動を広げることができそうです」とのご報告もありました。参加者の皆さまからは次のような嬉しいご感想が届いています。

「会議室で、社内の知らなかった人とも一緒におしゃべりをしながら楽しめるのが嬉しい。」

「ちょうど夏休みに家族でカンボジアを旅行したばかりで、子どもがカンボジアやスラムの現状について考える良い機会となった。」

「自宅にいながら体力的に無理なく参加できるため、母や祖母が進んで協力してくれた。」

今年度、9月までにカンボジアに届けた布の数は人形638体・ボール1,385個分。製作された遊具はカンボジア全土の幼稚園に配布されます。子どもたちはもちろん、遊具の縫製を行う農村の保育者・保護者にも貴重な現金収入の機会として喜ばれています。今後もより多くの遊具を届けたいと思っています。



② 「村の幼稚園」卒園児の今

「この飛行機、よく飛ぶんだよ！」と自慢げに見せてくれた、タプロム村の幼稚園の園児。

当会が2011年より実施し、現在9ヶ所の幼稚園を運営している「“村の幼稚園”開設事業」。タプロム村の幼稚園は当会が初めて開設した村の幼稚園の1つです。この幼稚園を卒園し、現在は小学校に通う姉弟、ボン・チョンハーちゃん（11歳、2013年卒園）、ボン・セインホン君（8歳、2014年卒園）に、幼稚園での思い出と現在の生活、将来の夢を聞きました。

チョンハーちゃんとセインホン君は両親、おばあさん、一番下の弟と一緒にタプロム村に住んでいます。お父さんとお母さんは池や畑でとれた魚と野菜、薪を売る仕事をしており、多いときには薪の大きな束を2束集めて売り、1束5000リエル（約150円）の収入になるのだそうです。お父さんとお母さんは毎日、子どもたちがまだ寝ている朝4時に家を出て仕事に出かけます。お母さんはお昼すぎに帰ってきますが、お父さんが帰宅するのは夕方になってからです。お父さんの帰りを待って家族全員で食べる夕食が、唯一の一家団欒の時間です。

—幼稚園での思い出

チョンハーちゃん：幼稚園の先生はすごく優しかった。文字や数字、歌、それに英語も教えてくれたし、豆乳、卵とお菓子も配ってくれたから。幼稚園でもらったおやつはいつも全部おいしくて、毎日欲しかったな。

セインホン君：幼稚園はすごく楽しかったけど、先生に2回だけ怒られた。1回目は友だちと喧嘩した時。僕が車のパズルで遊んでいたら友だちが来て、パズルを取ったから、その子を叩いて泣かせちゃって怒られた。2回目は勉強の時間に友だちとおしゃべりをしていて、先生の話を聞いていなかった時。この時は、みんなの前に少し立たせられたから恥ずかしかったな。

—小学校での生活

チョンハーちゃん：小学校は勉強が難しくて大変。算数と国語（カンボジア語）、どちらも難しいけれど、どちらかというと国語の方が楽しいな。学校が休みの日は、お父さんとお母さんが働いているから弟たちの面倒をみてる。料理はまだできないけど、作れるようになりたい。おばあちゃんとお母さんが作る料理はとてもおいしいから、いつか教えてもらいたいな。一番好きな食べ物は、サムロームチュークルアン（牛肉、空芯菜が入った酸っぱいスープ）！

セインホン君：小学校は本当に楽しい。僕は国語より算数の方がおもしろ

いと思う。でも、幼稚園の時も友だちとかくれんぼとかケンケンパをしてる時が一番楽しかったし、今も遊んでいる時が一番楽しいな。お家ではいつも、薪を集める手伝いをしてる。お父さんは仕事で売る分の薪を集めているから、僕はご飯を炊くための薪を拾いにいくんだ。休みの日だったら２～３束は集めるよ。

―将来の夢は？

チョンハーちゃん：お医者さんになりたい。村にはお医者さんがいないから、遠くの村まで行って治療を受けないといけない。でも、私がお医者さんになれば、みんなが村で治療を受けられるでしょう。だから、村のみんなを助けたいし、人の役に立ちたい。

セインホン君：僕は警察官になりたい。かっこいいし、泥棒を捕まえられるから。カンボジアの国の人たちの役に立てるような警察官になりたい。

村の幼稚園では、おやつ・豆乳の提供、絵本や教材を使った勉強、衛生教育など、人生の基礎を作る幼児教育を行います。幼稚園ができる前は、就学年齢である６歳になっても小学校に通えない子どもが多かったタプロム村ですが、今では大人たちの意識が変わり、幼稚園を卒園した子どもたち全員が小学校に入学、２人のように将来の夢に向かって勉強しています。一方で、特に貧しい地域であるタプロム村では保育者の先生が定着しない、保護者からの協力金が十分に集まっていないなど、自立運営に向けては課題があるのも現状です。当会では、村人の手による自主運営が達成されるまで保育内容・資金の両方の面から村の幼稚園の支援を続けていきます。ぜひ、これからも皆様のサポートをお願いいたします。

（上段・中段）2015年度タプロム村の幼稚園に通う子どもたち。大きな車の上から飛ばす紙飛行機はいつもよりも遠くに飛ぶ。

（下段左上）人の役に立ちたいと語る２人の孫を、嬉しそうに見守るおばあさん。（左下）一番下の弟をあやしながら一生懸命に質問に答えてくれたチョンハーちゃん。（右）主役としてカメラを向けられ、少し緊張気味のセインホン君。

3 トロピエンクラサン織物センターの女性たち

当会が運営するトロピエンクラサン織物研修センター（以下、織物センター）では、女性の自立支援と伝統的な染織技術の復興を目的とした研修、手織りの製品作りを行っています。近年、織物センターがある地域にも縫製工場が建ち、織物や農業を止めて工場労働者として家族を養う人も増えました。大きく変わりつつある人々の暮らしの中で女性たちはどのような生活をしているのか。織り手の一人、スーン・キムさん（29歳）に聞きました。

キムさんはタケオ州サムロン地区ドックポー村で6歳と4歳になる2人の息子と暮らしています。子どもたちの父親は1年ほど前、他の女性と暮らすために家を出て行ってしまいました。織物が盛んなサムロン地区で育ち、小さい頃から母親や祖母が織物をするのを見てきたというキムさんは、カンボジアの伝統的な織物文化を受け継ぐ数少ない女性の一人です。

16歳の時、他団体が主催する織物研修に参加して初めて織物を習いました。研修では基礎的な織物技術として1種類の模様を織る方法を学びました。祖母や母のように織物で生計を立てるためにもっと色々な模様を織れるようになりたいと思い、2007年、織物センターでの研修に参加しました。研修では1年間住み込みで、草木染めの括りと染めから織りまで幅広い技術を学びました。家族のように毎日みんなと一緒に食事をしたり、3人で1つの蚊帳に入って寝たりと楽しい思い出ばかりです。修了後は自宅で絣織りを続け、布をCYK（当会カンボジア事務所）や仲買人に売ることで生計を立てていました。しかし、家族全員を養うには収入が安定せず、やむなく村から20kmほど離れた所にある縫製工場へ働きに出ました。けれど、どうしても織物の仕事をしたいと思い、2014年に再び伝統絹絵絣「ピダン」の技術研修を受講しました。今では16歳の頃に憧れていた複雑な絵絣も織ることができます。

しかし、残念なことに昔と比べてカンボジアでピダンを買う人は減ってしまいました。今ではピダン製作の注文もなく収入が少ないため、織物を続けながら縫製工場で働く毎日です。工場では月に26時間ほど残業をして、190ドルの収入があります。しかし、この給料をもらうためには、以前よりも長い時間、子どもたちの元を離れて働かなければなりません。私の生きがいである子どもたちといられる時間が少ないのが本当に辛いです。

将来は、私たちが織る布がカンボジアだけでなく、日本や世界でもっと売れるようになってほしいと強く願っています。CYKから依頼を受け、私が織った布が日本やカンボジアで人々に買ってもらえるというのは大きな誇りでした。布の注文がもっと増えたら自宅で織物をして生計を立てて、子どもたちとも長い時間一緒に過ごせるようにしたいと思っています。

織り機の布は絣織り。細心の注意を払いながら、細かい模様を織り込んでいく。

ソーラーランタンの光の下で糸を括る作業をするキムさん

布や織物製品を購入することで彼女の生活を支えてくれている人に感謝を伝えたいというキムさん。織物の仕事や工場での仕事、2人の息子さんについて一生懸命に語ってくれました。キムさんのような村の織り手たちが織物で生計を立てられるよう、当会はこれからカンボジアと日本、そして世界に目を向けた販路の開拓に取り組む必要があります。

CYR情報

2016年カレンダー「カンボジアの子どもたち」販売のお知らせ

幼い難民を考える会では2016年カレンダーを販売中です。
撮影はカンボジアを中心に活動されている写真家の高橋智史さん。
友だちやきょうだいと遊んだり、学んだり、笑ったり…、カンボジアの子どもたちが活き活きと暮らす日常を切り取りました。
笑顔の子どもたちとともに、2016年を過ごしてみてはいかがでしょうか？

定価　1000円（税込み、郵送料込み）
申し込み方法　ニュースレター同封の申込用紙をご覧ください。

子どもたちの明日 115号
発行日：2015年11月11日　発行者：廣戸 直江

特定非営利活動法人幼い難民を考える会
東京事務所（CYR）
〒110-0016　東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2A
TEL: 03-6803-2015　FAX: 03-6803-2016
Email: info@cyr.or.jp　URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所（CYK）
#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn, Phnom Penh, Cambodia
TEL: (+855) 23 210849　FAX: (+855) 23 210849
Email: info@cyk.org.kh　URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会（CYR）は認定NPO法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。